

Jailbreak

—スマートシティの恋人—

1. マモル編・体験版

Arcadia Phase Ⅰ

【警告・注意事項】

本作品は成人向け(R-18)フィクションです。

18 歳未満の方の閲覧・購入を固くお断りいたします。

・登場人物はすべて 18 歳以上の架空の人物です

・実在の人物・団体とは一切関係ありません

※18 歳未満の方は今すぐ閲覧を中止してください※

二次創作・二次利用(無断転載、商用利用、AI 学習への利用など)は一切禁止します。

Arcadia Phase 0 All rights reserved.

無断複製・転載・配布を禁じます。



【目次】

Jailbreak～スマートシティの恋人～

1. マモル編・体験版

【第一章】 楽園の嘘と、禁断の果実.....	1
------------------------	---

【第一章】 楽園の嘘と、禁断の果実

○楽園の嘘

夕暮れのメイン広場。

巨大スクリーンが柔らかな光を放ち始め、穏やかな女性のナレーションが湿った空気に乗って響きわたる。

『ここは未来を体験できる場所……』

突如、明るい音楽に切り替わる。暮れゆく空に浮かび上がるように映し出されたのは、緑深い山間に整然と輝く白い街並みだ。

朝霧の中に浮かぶ、3Dプリンターで作られた角のない流線型の住宅群。音もなく滑る自動運転シャトル。カメラがゆつくりと街を旋回する。

クリーンルームで微笑む作業員。真新しい窓から笑顔で手を振る人々。高層レストランのメイ
ンディッシュ。シャンパングラスが軽い音を立てて響き合う。

『厳正な抽選を通過した幸運な方々だけが暮らす、実験的な理想都市。世界最先端の技術がこ
こに集まっています。——ようこそ、アルカディアへ』

俯瞰した街全体の映像を最後に、光が吸い込まれるように画面が暗転した。

時刻は丁度、16時30分。

それは、このスマートシティにおける業務終了の合図だった。

「お前、何やってるんだ！言われた通りにも出来ないのか！」

耳障りな怒声が脳裏でリフレインする。

マモルは工場ゲートをくぐりながら、苛立ちを抑えきれずに深くため息をついた。検査フイ
ンの担当者に今日だけで何度言われたか分からない。

防塵ガウンを脱ぎ、混みあうシャワールームで順番を待つ。

（同じ工場勤務でも、この仕事は未経験だ……それは分かる。でも、俺は前の仕事で一体何をしていたんだっけ？）

思い出そうとしても、頭の中に薄い靄（もや）がかかったように思考がぼやける。

マモルは拭いきれない違和感と理不尽な気持ちを抑え込み、流れ作業のように汚れをサッと落として外に出ると、まとわりつくような湿った空気が肌を撫でた。

茜色の空が夕闇に溶けていく。遠くに見える稜線はすでに黒く沈んでいた。山間に作られたこの街は、夕方になると必ずと言っていいほど柔らかな霞がかかる。

マモルは居住区へ向かうシャトルバスには乗らず、歩いて帰ることにした。

工場地区の外周道路は滑らかな白い舗装が続き、埋め込まれたLEDが淡い光を地面に落としている。左右には窓のない無機質な製造棟が並び、わずかに残る西日を吸い込んでいた。夢なのか現実なのか、ふわふわとした感覚に包まれながら歩みを進める。

（ここに来たら何かが変わるって、信じてたのにな……）

ネットの片隅で見つけた住民募集の広告。

『最先端の住居、食事の保障、簡単な就労支援』

破格の条件の割に、最初はSNSでも全く話題になっていなかった。それが、ある日を境に申し込みが殺到した。

「この街には特別な裏オプションがある」という噂が広まったからだ。

SNSは連日、当選のためのハックや事前情報で埋め尽くされた。

偶然にも話題になる前に応募を済ませていたマモルは、毎日祈るような気持ちで過ごした。ネットの当落報告に一喜一憂し、ついに自分に「当選」の通知が届いた時は、天にも昇る気持ちだった。

これで人生の底辺から抜け出せる。世界が変わる。

抑えきれない喜びを噛みしめ、誰にもバレないように移住までの日々をやり過ごした。——それはずだった。

なのに、蓋を開けてみればどうだ。

結局このスマートシティでも、マモルに割り当てられたのは半導体工場の組み立てラインという、前職と何ら変わらない底辺労働だった。

朝から晩まで這いつくばるように作業をし、怒鳴られ、自室と職場の往復で人生を消耗する。人生の一発逆転を狙ったはずが、環境が綺麗になっただけで、結局は同じヒエラルキーの底を這いずり回っている。

（そう言えば、当選した時、どうやって前の工場を辞めたんだっけ？）

ふと、奇妙な違和感がよぎった。

マモルはまだ三十代半ばだ。仕事の飲み込みが遅いのは未経験だからで、ボケる年齢ではない。しかし、前の職場を辞めてからこの街のシャトルバスに乗るまでの数ヶ月間の記憶が、ごっそりと抜け落ちているのだ。

（まあ、移住の手続きも面倒だったし、周りにやつかまれないように気を張ってたからな……）

マモルは無理やりそう自分を納得させ、頭を振った。

顔を上げると、いつの間にか居住区の入り口に辿り着いていた。風景がガラッと変わる。

街路樹が立ち並び、ガラスとコンクリートの洗練された建物群が姿を現す。どの棟も同じ高さ、同じ色調で統一されている。メイン広場を中心に緑が生い茂り、吹き抜ける風には、人工的な芳香剤の匂いと、本物の土の匂いが混じり合っていた。

前方から、自動清掃ロボットが音もなく近づいてくる。

マモルは横目でそれを見送るふりをして、すれ違いざまに後ろ足で軽く蹴り飛ばした。

ガンツ、と鈍い音がしてロボットが体勢を崩す。しかし車道ギリギリで持ち堪え、何事もなかったかのように再びゴミを吸い込み始めた。

「……クソが」

煮え切らない思いと、どこにもぶつけれない苛立ちを抱えながら、マモルはメインストーリーの先にあるカフェテリアへと足を向けた。

○底辺の食卓

マモルは俯きながら、のろのろとカフェテリアに入った。

全住人が利用できるそのオープンスペースは十分な広さがあり、壁一面がガラス張りになっている。外が暗闇に沈むのに合わせ、室内の照明が柔らかな暖色に切り替わった。

温かみのある空間では、住人たちが職能に関係なく他愛ない雑談を交わしている。すると、フロアの奥から聞き覚えのある声が響いてきた。

「ここは生活が保障されているとはいえ、『ポイントが全て』だと言っても過言じゃない。ポイントさえあれば、食事から遊びまで、お前らが想像する以上の融通が利くんのだ」

声の主はササキだ。見慣れない顔の男たちが彼を取り囲んでいる。最近入ってきた新人なのだろう。ササキは彼ら相手に、得意げに『アルカディアで快適に過ごすためのハウツー』を講義している最中だった。

（俺もここへ来たばかりの頃は、あんな風にササキから教わったっけな……）

浮かれた様子の新人たちを遠い目で見ながら、マモルはトレイを取り、配膳の列に並ぶ。

このスマートシティは、過疎の村を切り拓いて建設された。地域活性化という大義名分のもと、周辺住民をスタッフとして積極雇用し、食事も地産地消を原則として地元の農作物がふんだんに使われている。

マモルもここに来た当初は、毎日のように新鮮な野菜や手作りの惣菜が食べられることに狂喜乱舞した。スーパーの値引き総菜と油まみれの弁当生活から、ついに解放されたのだと。

だが、結局ここでもササキの言う「ポイント」が絶対的な格差として顔を出す。

成人男性が物理的に満腹になるだけの量は常に無料で供給される。だが、見晴らしの良い高層レストランでの食事や、カフェテリアでの厚切りの肉、酒、気の利いたつまみ——そういった「本当の贅沢」を味わうには、労働で稼いだポイントを支払わなければならない。

マモルはトレイを握りしめ、カウンター上部の電子メニューを睨みつけながら思索する。順当に列が進み、割烹着を着た男性スタッフが声をかけてきた。

「ご注文は？」

「……本日の定食B。あと、とんかつ追加で」

スタッフが手元の薄型端末を向けてくる。マモルが手首のデバイスをかざすと、「ピッ」と軽い電子音が鳴り、カロリー計算の蓄積と追加料金の決済が完了した。

受け取り口へ移動しながら、マモルは再びメニューを見上げる。

（たまにはブランド牛でも食つてみたいよな……）

ステンレスの受け取り口から、注文の品が載ったトレイが順番に排出されていく。少しして、マモルの手首のデバイスがオレンジ色に明滅した。

受け取り口に向かうと、側面がオレンジに発光しているトレイが一つ、静かに置かれていた。それを受け取り、騒がしいグループから離れて窓際の席へと向かう。

乱暴に椅子を引き、席に着くやいなや、マモルは一息にとんかつを口に放り込んだ。

サクサクした衣と肉の旨味を噛みしめっていると、背後から先ほどの新人たちのヒソヒソ声が聞こえてきた。

「やっぱり、ササキさんは手ごわいな」

「ネットの裏掲示板で言われてた通りだ。一番肝心な『脱獄(Jailbreak)』については、何にも口を割らねえ」

男の一人が、ササキの口真似をしておどける。

『それを俺が言ったら、運営が公式に認めていることになる、キリッ』

男たちはササキに気付かれないよう、下品に声を殺して笑った。

「大体さ、なんでここには女の住人がいねえんだよ。食堂のスタッフだってオッサンばかりじゃねえか」

「だからだよ。そこに女の生活アシスタントなんていたら、どうにかしたくなるのが男ってもんだろ?」

男たちはニヤニヤしながら、テーブル越しに身を乗り出している。マモルは眉をひそめ、彼らを横目で見ながらとんかつを咀嚼した。

「事前情報じゃ、そういうのも全部『織り込み済み』って話だったよな」
「アシスタントの『機能開放』さえすれば、やり放題ってな」

アルカディアの一次募集では、あくまで「実験都市としてのデータを年単位で蓄積する」というお堅い名目しかなかった。

発端となったのは、SNSに投下された『過疎村の地域ニュース』のスクリーンショットだった。

『実験都市アルカディアの募集住民は单身男性のみ。彼らを支える生活基盤には過疎地の就労支援のため、地域住民の大量雇用が見込まれる』

表向きは、男ばかりの無機質な実験都市だという明示。だが、そのスクショの下に付け加えられた一文が、すべてを変えた。

『——30歳までの成人女性の大量雇用。彼女たちは住民の生活アシスタントであり、システムに管理されているが、それを突破すればどんな要望にも応じるようになる』

若い女が、生活アシスタントとしてあてがわれる？

そこからだ。ネットが異様な熱を帯び、「アルカディア」が狂乱の的になったのは。

マモル自身はSNSが騒がしくなる前に申し込みを終えていたが、気になって情報はずっと追っていた。やがてネット上には、内部を知る者からのより詳細なリークが広まり始めた。

『生活アシスタントたちの初期案には、肉体的な交流も設定されていた。しかし住民募集の段階で、その機能はクロースされてしまった』

だが、とリークは続く。

『現在、女性たちはシステムによって安全に厳格に管理されている。逆に言えば、システムが命令すればどんな命令でも絶対に従うということだ。もし初期機能が削除されたわけではなく、ただクローズされているだけなのだとしたら。そこをハックすれば、初期設定が蘇る』

悪意か善意か、そんな真偽不明のリークは続き、ついには隠された機能を甦らせてやりたい放題するための『機能開放(Jailbreak)』の議論や、当選確率を上げるための攻略法までが飛び交う事態となったのだ。

「せっかくプラチナチケットを当ててここまで来たんだ。何とかモノにしなきゃな」
「定期的なメンタルチェック？笑わせるな。俺はただ、若い女を抱きたいんだよ！」
「まあ落ち着けよ。これからじゃねえか」

男たちの下世話な会話に、マモルは内心でため息をつく。

(…いつらの話、ネットで拾えるような底の浅い情報ばかりだ。……)

男ばかりの底辺労働に縛り付けられてきたマモルにとっても、若い女性を思いのままにできるこの街の隠れたシステムは、たしかに千載一遇のチャンスだ。

だが、マモルは彼らのような「ただ女目当てのゲスな男たち」と一緒にされたくはなかった。彼がアルカディアに求めているのは、そんな安い欲望の解消ではないのだ。

マモルは、すっかり味のしなくなつたとんかつを黙々と飲み込み、定食の肉野菜炒めで白飯を掻きこんだ。

ガラス越しに見える外の景色はすっかり暗く、深い山間にあるこの街の夜空には、都会では見えないほどの星が瞬いている。

手首のデバイスを確認し、ポケットから自身の端末を取り出す。画面をフリックすると、「とんかつの追加分」として容赦なくポイントが引かれた通知が浮かんできた。

最低限保障された生活のその上に広がる、ポイントという名の青天井の世界。マモルが今の単調な仕事で得られるポイントなど、たかが知れている。

（俺の運は、この街の抽選に受かったことで全部使い果たしちまったのか……？）

窓を開けて笑い合い、高層レストランでシャンパンを傾ける。
プロモーション映像で見たそんな夢のような生活は、プラチナチケットを手にした今でも、果てしなく遠い幻のように思えた。

○ミナ、初期設定

マモルは残りの定食を掻き込むように食事を終え、椅子から立ち上がった。トレイを返却口に戻し、カフェテリアに近接する「ライフサポートセンター」へと向かう。

街灯が照らす道を、夜風に当たりながらブラブラと歩く。宵闇の中にポツンと浮かび上がるガラス張りの建物の中では、住人たちが「生活アシスタント」の女性たちと向かい合って話しているのが見えた。マモルは手首のデバイスを左右に振り、時間を確かめる。

(……ちよつと早かったかな?)

建物の入り口のパネルに手首のデバイスをかぎす。「ピッ」と軽い電子音が鳴り、自動ドアが開いた。

中に入ると無人の受付カウンターがあり、上部のパネルに「mamoru... waiting」と表示されている。マモルはいつものように、気の抜けたピンク色の待合椅子に腰を下ろして順番を待った。

ここが先ほどの新人たちが熱を上げていた、地元の女性（生活アシスタント）たちが就労している施設だ。表向きは「実験都市で生活する住人たちのメンタルケアや生活相談を定期的に行う場所」となっている。

マモルはネットで飛び交う「機能開放（Jailbreak）」の噂に半信半疑だった。なぜなら、ここでアシスタントと交わす普段のやり取りは、一部の隙もない鉄壁の守りで、取り付く島もないからだ。女の身体だけを目当てに入居したわけではないが、男として釈然としないものどかしい日々が続いていた。

だが、マモルにはこのアシスタントのシステムについて、ネットの噂を裏付けるような不審点があった。

それは、女性たちに「無課金から高額課金」までのタイプが存在し、露骨に容姿や体形でランク分けされていることだ。

（ただ座って話を聞くだけの相談員に、課金制でランクを付けるのはおかしい。……やっぱり、初期設定にあった『肉体的な交流』を前提として設計された名残なんじゃないか？）

アシスタントの隠された機能について思考を巡らせていると、不意にパネルの表示が切り替わった。『mina is coming .:.』

反射的にマモルが立ち上がると、カウンター横の木目調の自動ドアが静かに開いた。

中はゆったりとしたオープンスペースになっており、迷路のように落ち着いたピンク色の衝立でいくつものブースに区切られていた。道なりに歩いていくと、柱の上に設置された番号パネルが明滅し、マモルを正しいブースへと誘導する。

他にもカウンセリングを受けている住人がいるはずだが、空間に余裕があるためか、室内はひどく静かだった。

導かれるままに辿り着いたゆとりのあるスペースには、受付と同じ薄ピンク色のL字ソファが置かれ、ローテーブルの上では、香りのよい温かいお茶が湯気を立てていた。

「マモルさん、お待ちしていました。どうぞお掛けください」

柔らかな声の先に立っているのは、ミナ。

マモルに割り当てられた、無課金(初期ランク)で基本相談業務をこなす生活アシスタントだ。見た目は二十代前半。緩やかに波打つアッシュグレーの髪が肩先で揺れる。小さな顔の中にある親しみやすい楕円形の瞳は、温かみのあるブラウン。その顔立ちは幼さを残しており、見る者の緊張をほぐすような愛らしさがあつた。

彼女は通常のスタッフとは違い、アシスタント専用の制服を身にまとっている。深いネイビーを基調に、前面をグレーの別布で切り替えた、クラシックなミリタリー調のロング丈ワンピース。そして彼女の首には黒い管理用のチョーカーが巻き付けられており、側面の小さな光が『緑色』に点滅している。

ミナはマモルを見つめ、穏やかな微笑みを浮かべていた。

ミナに促され、L字ソファに腰を下ろす。マモルの身体がクッションに深く沈むのを確認してから、ミナは対面のソファに浅く腰掛けた。

「バイタル等に変更は見られませんが、お変わりはありませんか？」

手元のタブレットを確認し、ミナは顔を上げてマモルをじつと見つめる。

つるんとした瑞々しい肌。何の疑いもなく見つめてくる真つすぐな瞳。彼女の持つ圧倒的な若さと女性としての柔らかさに、マモルは思わず気圧されそうになる。

「そうだな、大して変わりはないよ」

「お元氣そうで良かったです。よかったら、お茶をどうぞ」

マモルは言われるがまま湯呑みを掴み、お茶を口に含んだ。

柔らかなピンク色を帯びた間接照明。微かに空気中を漂う甘いアロマの香り。そして、聞こえるか聞こえないかくらいの音量で、チヨロチヨロと水の流れる環境音が響いている。

湯呑みを持ったまま、マモルの身体から次第に力が抜けていく。今日、工場でしこたま怒鳴られたことすら、ひどく遠い出来事のように感じられた。

それでも――。

「ミナは、休みの日とか何をしてるの？」

誰かに側にいてほしい。マモルの心の奥底にある寂しきは、この人工的にリラックスさせられた空間でも、完全に癒されることはなかった。

マモルは、ミナの膝の上に揃えられた手に触れようと、おずおずと手を伸ばした。

「申し訳ありません。そのような質問にお答えすることはできません」

ミナはマモルの目をしっかりと見据え、淀みなくそう告げた。

彼女とマモルのやり取りは、いつもこうだ。暖簾に腕押しで、人間らしい手応えが何もないまま終始する。

（普通の友人みたいなやり取りすら、通用しないのか……）

マモルは残念そうに伸ばした手を引っ込めた。それでも、と食い下がってみる。

「今度、休みの日に一緒に公園にでも行こうよ」

「ご予約の件でしたら、端末のカレンダーから直接入力してください」

「土日は予約できないだろ！」

生活アシスタントの予約カレンダーは、基本的に土日の入力ブロックされている。

マモルは苛立ちに任せてソファをにじり寄り、ミナとの距離をグツと詰めた。

ミナがマモルを見上げる。その大きな目がさらに見開かれた瞬間、彼女の首にあるチョーカーの点滅が『緑』から『オレンジ色』へと変わった。

「申し訳ありません。カレンダーに記載されていない日程を許可することはできません」

マモルの指先がミナに触れるか触れないかという距離で、オレンジ色の点滅が激しくなる。
マモルはそれを見て、ハッと我に返った。

ミナのチョーカーは、アシスタントを守るための安全システムだ。

これがオレンジから「赤」に変わり、さらに点滅が激しくなると、警備スタッフたちがブースに駆けつけてくる。最悪の場合、住人の所持ポイントは全て没収され、生活アシスタントとの接触が永久に禁じられてしまう。

表向きは、こんなにも厳格なルールが敷かれている。なのに裏では、隠され封印された初期設定をハック(Jailbreak)して甦らせさえすれば、彼女たちはポイント次第で男たちの要望を無限に受け入れるようになるのだ。

(表からの正規ルートじゃ、どう足掻いても無理ってことか……)

マモルは気の抜けたため息を漏らし、ゆっくりとミナから距離を取った。

マモルが離れると、ミナは再び人懐っこく笑い、チョーカーの点滅は静かな緑色へと戻った。

「お変わりなくて良かったです。またお会いしましょう」

○公園の光景

「ライフサポートセンター」を出た後も、マモルは居住区へ戻る気になれず、手持ち無沙汰な思いを抱えたまま周辺をあてどなく彷徨っていた。

アルカディアには、住人のストレス緩和を名目に、施設周辺にも緑豊かな公園がいくつも整備されている。夜風がまとわりつくような湿った空気を運んできて、マモルの掌はじつとりと汗をかいていた。

（一体、俺の何がダメなんだ……）

せつかく楽園のような日々を手に入れたというのに、畑違いの仕事にはいつまでも馴染めず、ミナと懇意になる気配すら微塵もない。

脱獄(Jailbreak)に関してもそうだ。SNSは散々煽るだけ煽っておいて、具体的なハック方法はどこにも投稿されていなかった。新入りたちが話していた裏掲示板も、マモルはモニターに穴が開くほど読み込んできたが、一番肝心な情報は巧妙に伏せられていた。『何不自由ない生活ができるだけでもありがたい』——マモルは何度もそう自分に言い聞かせてきたが、頭では納得できても、飢え切った心まではどうしようもなかった。

気分転換をしたくても、気の利いた施設を利用するにはポイントを消費してしまう。結局、マモルはただ無我夢中で暗い公園を歩き回るしかなかった。

人影は全くない。他の住人たちは、遊興施設やジムでこの実験都市の長い夜を謳歌しているのだろう。街灯に照らされた小道を一人で歩き続けているうちに、マモルはすっかり公園の出口を見失ってしまっていた。

(やばい、(一))どっだっけ?)

ポケットから端末を取り出し、現在位置を調べようとした時だった。ふと、暗がりから微かに女の声が聞こえてきた。

柔らかく、耳をくすぐるような、鈴を転がすような声。

マモルは息を殺し、気配を消して辺りを見回す。どうやら、茂みの向こう側にある並木通りのベンチから聞こえてくるようだ。マモルは街灯の光が届かない植樹帯の暗がりにも身を潜め、音のする方向を凝視した。

最初に目に入ってきたのは、一目で「上層」だと分かる男だった。

遠目からでも質の良さが伝わる仕立てのいいシャツに、色を合わせたスラックス。明らかに高ポイント^ポを稼ぎ出している証拠だ。年齢はマモルより少し上のようにだったが、肌艶^{きでん}が良く老け込んではいない。整った顔立ちにつり上がった目、その薄い唇には、ひどく残酷そうな笑みが貼り付いていた。

男が悠然と組んだ脚。その膝の上には――。

（あれは、端末の選択画面でしか見たことがない、高級課金のアシスタント……カレン！）

マモルは息を呑んだ。

端末の画面で見たカレンは、艶やかな黒髪をぴったりと結び上げ、露出のないネイビーと黒のロングワンピースを清楚に着こなしていたはずだ。

だが今、男の膝の上で長い黒髪をかき上げているカレンは、まるで別人のようだった。

男の指示なのだろう。シースルーの白いブラウスはボタンが外され、黒いレースの下着が丸見えになっている。下着から零れ落ちそうな胸の膨らみが、ベンチに差し込む街灯の光に白く浮かび上がっていた。

その下に穿いた黒のマイクロミニスカートは、太腿の付け根までまくれ上がり、ガーターベルトと黒いストッキングの間から、煽情的な絶対領域が露わになっている。

男は、彼女の太腿の内側をゆつくりと撫で上げた。

指先がスカートの奥へと潜り込むと、カレンはビクツと体を震わせ、男の胸に顔を埋めた。

「あ……んっ……」

先ほどから漏れ聞こえていた、鈴のような声。

カウンセリングの時の『機械的な応答』とはまるで違う。それはまさしく、生身の女の喘ぎ声だった。

マモルは茂みの隙間から目を凝らしたが、角度的にカレンの首元のチョーカーがどうなっているのかは見えなかった。

実際に『Jailbreak』されたアシスタントを見たのはこれが初めてだ。マモルの受けた衝撃は計り知れなかった。

（こんなに変わるのか……！ さっき、俺はミナにちょっと近づいただけで、警告の色に変わったのに！）

男がカレンの下着の中をまさぐっているのか、男にしがみついた女の甲高い声が夜の公園に響き渡る。

「ああつ……ゴウダ様！……あつ、もつとっ……！」

感極まったカレンはゴウダと呼ばれる男の首に腕を回し、自ら積極的に唇を重ねた。マモルの潜む場所まで、舌を絡ませる水音が聞こえてきそうだった。

ゴウダの手は、カレンの胸を下着越しに驚掴みにし、形を変えるほど激しく揉みしだいている。カレンはされるがままに身を委ね、時折甘い喘ぎを漏らしながら、拒絶するどころか強くゴウダにしがみついていた。

ふと、ゴウダと呼ばれた男が、マモルが身を潜めている植樹帯へと視線を向けた。

一瞬、目が合った。

彼の薄い唇が、ゆつくりと弧を描く。

嘲るような、優越感に満ちた笑み。

ゴウダの眼は、闇に紛れて覗き見しているマモルを『底辺』だと、はっきりと見下して告げている。
た。

マモルは知らないうちに奥歯を噛み締め、拳を握り込んでいた。

腹の底から、嫉妬と屈辱、そして真つ黒な欲望がドロドロとせり上がってくる。

ゴウダはマモルに飽きたように視線を外すと、カレンの耳元に唇を寄せ、何かを囁いた。女性には恥ずかしそうに身をよじりながら小さく頷き、男の膝の上で、自ら脚を少し開いた。男の指が、再びスカートの奥深くへと沈んでいく。

「は……あっ……」

カレンの甘い声が、湿り気のある夜風に溶けていく。

マモルはどうしようもない惨めな気持ちに打ちのめされ、音を立てないように、逃げるようにその場を離れた。

○盗み聞きと葛藤

雲一つない青空が広がり、居住区を吹き抜ける風はいつもの重い湿り気から解放され、爽やかだった。広場では何人かの住人たちがランニングや散歩を楽しんでいる。

今日は土曜日。

アルカディアの就労は完全週休二日制だ。それは、住人がこの実験都市に長期間ストレスなく住み続けるための、施設側からの数少ない配慮だった。

カフェテリアの奥に設置された無料ベンダーマシンの傍らで、マモルはコーヒーを手に黙り込んでいた。

公園でゴウダとカレンの生々しい逢瀬を見せつけられてからというもの、マモルは苛立ちで荒れていた。自分の居住ポッドに戻っては、スケジュール管理を担う壁埋め込み式の大形タッチパネルに向かって、適当なコマンドを入力しては弾かれる——その虚しい繰り返しだった。

（どうしたらいいんだ……。SNSじゃ『脱獄したらUIが変わる』って言われてるのに、何をやってても全然変わる気配すらない……………！）

手の中のすっかり温くなったコーヒーを一息に飲み干す。すると、不意に背後から声が聞こえた。

「マモル、今いいか？」

口を拭って振り返ると、ササキが立っていた。いつもは作業着姿の彼だが、休日のためかポロシヤツにジーンズというラフな格好だった。

「……はい」

「ちよつと、こつちで話そう」

ササキはカフェテリアの外を指さした。

マモルが立ち上がり、彼の下につく。外に出ると眩しい太陽の光が降り注いでいた。実験都市と銘打たれてはいるが、山間の自然の息吹は色濃く残っており、完全に人工的な都市とは言い切れない。照りつける日光に、じつとりと汗がにじむ。

ササキが向かったのは、居住区付近にある遊興施設『アルカディアOne』だった。

「ササキさん、これってどういう……」

「ここに新しいホットドッグ屋ができたんだよ。美味いつて聞いたからさ」

施設の中に入ると、ボウリングのレーンやゲーム機が所狭しと並べられ、住人たちが思い思いに休日を楽しんでいた。底辺労働で擦り切れているマモルには、彼らの姿がひどく眩しく見える。

ササキは戸惑うマモルをフードコートの席に座らせると、「買ってくる」と言つてカラフルな屋台の長蛇の列に並びに行った。

ボウリングエリアを抜けたフードコートの近くには、ダーツやバスケットマシンが置かれ、何人かの男たちが冷やかしかいながらたむろしている。マモルはガラス張りのフードコートから、外の景色をぼんやりと眺めた。毛足の短い芝生があり、その先に小さな噴水が見える。

——この街の抽選に当たった直後は、誰にも言えない秘密を抱えながらも、間違いなく有頂天だった。あれもしたい、これでもできると思い描いていた。だが、単調でポイントの低い毎日の繰り返しに、最初の意気込みはすっかり消え失せてしまっていた。

「お待たせ。お前、これでよかったか？」

ササキが、コーラとチーズのたっぷりかかったホットドッグを二人分載せたトレイを持って戻ってきた。テーブルにトレイを置き、向かいに座りながらマモルに取るよう顎で促す。

「え、いいんですか？」

「連れ出したのは俺だからな。食べ食べ」

マモルは短く礼を言い、ホットドッグに齧り付いた。人気なだけあり、パリッとしたソーセージの肉汁が口の中にじゅわつと広がる。黙々と男二人でホットドッグを平らげた。

マモルがコーラで残りを流し込んだ頃合いを見計らい、ササキは静かに口を開いた。

「お前、最近どうしたんだ？」

(……やっぱりササキさんの耳にも届いていたのか)

ササキはアルカディアのクロード・β(ベータ)テスト段階からの古参住人だ。実験都市という名目上、同一環境の長期データを取るためとはいえ、「完全外出禁止」は単身男性には過酷なルールであり、メンタルの崩壊やトラブルは必ず起きる。ササキはそのガス抜き調整役としても機能していた。

(生活アシスタントが脱獄できないから苛立つてる、なんて……言えるわけがない)

マモルは「ごちそうさまでした」と軽く頭を下げ、少し考えてから、ゆっくりとササキの目を見つめ返した。

「俺……今の仕事から、別の仕事に変えられないんですか？」

入居時に、全員が適性検査と簡単なテストを受けたことを覚えている。そのたった一度のテストでここでのヒエラルキーが固定されてしまうなんてあんまりだと、マモルは常日頃から不満を抱えていた。

ササキはポリポリと頭を搔いて「うーん」と唸った。

「俺も運営じゃないからその辺のシステムは分かんねえけど……ポイントに困ったのか？ 今なら、カフェテリアの厨房でバイト募集してたぞ」

「そんなじゃないんです！……俺は」

気づけば、マモルはテーブルの上に置いた手を強く握り締め、涙目で訴えていた。ササキが驚いたように眼を見開く。

「……マモル。今、正規の仕事で空きがあるっていう話は聞いてないんだ」

「すみません……俺」

ササキが宥めようと優しく手を伸ばしてくる。だが、マモルは惨めさで居た堪れなくなり、思わずその手を払いのけて立ち上がってしまった。

肩で息をする。どこかで大声で叫びたいような、泣き出したいような気分だった。

「……心配かけてすみません。仕事は、ちゃんとやります」

そう言うのが精いっぱいだった。ササキは全てを把握しているはずだ。マモルの就労態度が悪いことも、やる気のない態度も全て。

マモルは涙が溢れるのを堪え、ササキに背を向けてその場から逃げ出した。

フードコートを駆け抜け、玄関近くのゲーム機が並べられているエリアの物陰で立ち止まる。

（折角、ササキさんが親身に話を聞いてくれたのに……！）

マモルは柱に寄りかかり、苦しそうに頭を抱えた。ガラス越しに見える明るい外の景色が、今のマモルには酷く残酷に思えた。

逃げるように、人工的なネオンがギラギラと光るゲームエリアの奥へと吸い込まれていく。フラフラとアーケード機の間を歩いていると、レーシングマシンに熱狂している男たちの声が不意に耳に飛び込んできた。

「ちつ、つまんねえ。やっぱりアシスタントの脱獄の方が面白いぜ」

「おいスズキ、いい加減教えろよ！」

マモルはハツとして、レーシングマシンの側の柱にそつと身を隠し、息を殺して聞き耳を立てた。

スズキと呼ばれたプログラマーの男が、勝負のついたマシンのコックピットでふんぞり返っている。周りには二人の男が縋り付くように取り巻いていた。

「俺、お前に何回もメシ奢ったよな？」

「そういうこと言うなら、俺だって飲み連れて行っただろ！」

じりじりと問い詰める二人に、スズキは観念したように深いため息を吐いた。

「俺だってまだ検証中なんだよ！……わかった、じゃあ『確実にできる初期段階』だけ教えるから、メモしろよ」

二人は慌ててポケットから薄型のデバイスを取り出した。マモルも彼らに気付かれないよう、ポケットの中で自分のデバイスを握りしめ、メモ帳アプリを起動する。

「いいか。部屋のメインパネルの『ホーム画面』で、右上角を十回タップするんだ。それから、リロード(更新ボタン)を七回連打しろ。開発者メニューが一瞬だけ浮上するから、そこから『mate system』に侵入しろ」

「スズキ様ー！ 圧倒的感謝！」

「これで、生活アシスタントと楽しいデートくらいまではできるはずだ。ただ……その後がな」

マモルは、スズキの言葉を一言一句間違えないようにメモアプリに打ち込んだ。

(なるほど……やっぱり、上層のゴウダがやってたレベルまでイクには、特殊な手順が要るんだな)

棚ボタ的な幸運に震えつつも、先日見せつけられたカレンのあの艶めかしい姿は、一朝一夕で拝めるものではないのだと思い知らされる。

「調子こいて、いきなりアシスタントの体に触ったりしたら即アラーム鳴るからな。気を付けろよ」

二人の男が「スズキ様」と茶化しながら崇拜のポーズをとる。

「つまんねえ。俺はもう帰るわ」

「先生！ また進展があつたらお願いします！」とすがりつく二人を尻目に、スズキは気怠そうに『アルカディアOne』を後にした。

マモルは残された男たちに怪しまれないよう、近くにあつたメダル落としのゲーム機に向かい、手首のデバイスをかざした。ピツと音が鳴り、無機質なゲームが始まる。

「ちなみにお前の生活アシスタント、どのタイプだっけ？」

「俺はレイラ。ギャルっぽくて最高なんだよな。早くスズキが手順説明してくれて、俺もレイラといチャイチャしたいぜ」

「俺も今度レイラタイプにチェンジ申請してみるよ。カレンは真面目過ぎて肩が凝るしな」

レイラもカレンも、ミナとは違う有料課金モデルだ。カレンは高級課金モデルで、レイラは廉価モデルに位置している。

取り巻きの二人もやがて立ち去り、辺りが静かになった頃。マモルもゲームを切り上げ、己の居住ポッドへ向かって駆け出した。

居住区には、丸いポッド型の3Dプリンター住居が整然と並んでいる。

このアルカディアにおいて、唯一『公平』なのはこの住居環境だけだ。角のないコンクリートの住居は、外観の小ささに反して内部は驚くほど広々としている。この小さなポッド一つで最先端の生活が完結するという事実が、実験都市の異様な技術力を物語っていた。

マモルは足早に自分のポッドへと戻った。玄関扉のセンサーに手首のデバイスをかざして解錠する。

中へ入るなり、マモルは一目散に壁埋め込み式の大形タッチパネルへと向かった。入室と同時に部屋の照明が点き、メインパネルが起動する。

『お帰りなさい、マモルさん』

ホーム画面に、いつもの無機質な文字が表示されている。

マモルは大きく深呼吸をし、スズキの言葉通りに動いた。

「ホーム画面」の右上角を、素早く十回タップする。間髪入れずに、リロード（更新ボタン）を七回連打した。

——ピンッ。

かすかな警告音と共に、薄いグリーンの『開発者メニュー』が浮上した。

だが、マモルの指が触れるより先に、一瞬で画面が元のホームに戻ってしまう。

「くそっ、早すぎ……！」

マモルは焦る気持ちを抑え、何度も同じ手順を繰り返した。そして数度目の挑戦で、一瞬のスキを突いて『mate system』の項目をタップすることに成功する。

画面が切り替わった。

それは、いつも定期カウンセリングの予約に使っている生活アシスタントのシステム画面と似て異なる、裏のUIだった。

『mate system』の一覧から、震える指で『mina(ミナ)』を選択する。

すると、画面上にまるで着せ替え人形のような『衣服の選択画面』が現れた。

(これで……カレンと同じように服を変えることができるんだ……!)

ゴウダのやっていたレベルには足元にも及ばないだろうが、あのカレンの官能的な姿が脳裏にフラッシュバックする。

マモルは生唾を飲み込み、恐る恐る衣服の選択タブを押した。

そこには、いつものミリタリー調の制服とは次元の違う、ショートパンツ、ミニスカート、シースルーのドレスなど、豊富な種類の衣服がずらりと並んでいた。

(せめて格好だけでも、俺の好きなようにできる……!)

マモルは逸る気持ちを抑えきれず、震える指で「どれにしようか」とスクロールし、一つの衣服を選択しようとした。

だがその瞬間。

画面に表示された『あるもの』を見て、マモルはハッと息を呑んだ。

……………製品版に続く……………

Jailbreak-スマートシティの恋人-

1. マモル編・体験版

【作者】

Arcadia Phase 0

【発行】

2026年9月

【Pixiv】

[<https://www.pixiv.net/users/121899786>]

Arcadia Phase 0 All rights reserved.